

令和3年度血液凝固異常症全国調査のまとめ

令和3年度の血液凝固異常症全国調査は1,194施設(1,368担当部所)に調査用紙を送付し、令和3年5月31日時点における状況を報告していただくよう依頼した。調査対象期間は令和2年6月1日から令和3年5月31日までの1年間である。調査の実施に当たっては、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針(平成29年2月28日一部改正)」を遵守するよう配慮した。

令和3年5月31日現在で集計した日本全国に生存する血液凝固異常症の総数は、下表に示すように9,639例(HIV非感染8,935例、HIV感染704例)となった。このうち、小児の血液凝固異常症の総数は1,425例であった。

日本全国における血液凝固異常症総数

	血友病 A	血友病 B	VWD	類縁疾患	小計
HIV非感染生存	5,124	1,091	1,483	1,237	8,935
(男性)	5,053	1,059	659	584	7,355
(女性)	71	32	824	653	1,580
HIV感染生存	533	161	7	3	704
(男性)	533	161	2	0	696
(女性)	0	0	5	3	8
HIV非感染・感染生存合計	5,657	1,252	1,490	1,240	9,639
(男性)	5,586	1,220	661	584	8,051
(女性)	71	32	829	656	1,588
AIDS発症(生存)	132	41	2	0	175
(男性)	132	41	0	0	173
(女性)	0	0	2	0	2
HIV感染死亡(累積)	555	164	1	9	729
(男性)	553	162	1	7	723
(女性)	2	2	0	2	6
HIV感染総数(生存および累積死亡)	1,088	325	8	12	1,433
(男性)	1,086	323	3	7	1,419
(女性)	2	2	5	5	14

VWD : von Willebrand病

AIDS発症: 治療により症状が消失したり、検査所見が改善したものも含む。

調査期間におけるHIV非感染の死亡報告は27例、HIV感染の死亡報告は5例であった。このうち、報告された死因の中にHCVの感染が原因と考えられる重篤な肝疾患が含まれていたものは、HIV非感染で5例、HIV感染で3例であった。

C型肝炎の治療薬として平成26年秋より登場した直接作用型の抗ウイルス薬については、インターフェロンを併用しない使用報告数が12例(HIV非感染9例、HIV感染3例)であった。

HIV感染症例においては、生存例の中に新規のAIDS発症報告はなく、また、死亡時にAIDS指標疾患の罹患があった報告もなかった。さらに、今年度のCD4陽性リンパ球数の平均値は535.1/μL、HIVのRNAコピー数は検出感度未満の割合が84%と、HIVに関しては比較的良好な状態が保たれている。

これまでの調査に引き続き、治療を要する糖尿病、高血圧、高脂血症、あるいは頭蓋内出血の既往歴に加え、慢性腎臓病(CKD)および骨粗しょう症の状況と、喫煙についても調査した。頭蓋内出血が起こった年齢に関しては、昨年度と同様に詳細な集計を行った。

また、血液凝固異常症のQOLに係るインヒビター、家庭療法、定期補充療法、さらに、凝固因子製剤の使用状況についても引き続き集計を行っている。

血液凝固異常症全国調査は本邦における血液凝固異常症の全体を調査対象とし、その現状および問題点を把握するための唯一の調査であり、今後も調査票の回収率の向上に努めつつ、慎重な調査を継続していきたい。